

文芸

俳句

風生の句碑立つ嶺へホトトギス 池田 逸子
 身の丈の縮みし齡更衣 伊藤 敬子
 闇深し滴る音の冴えにけり 伊藤 定男
 葛餅や黒蜜たつぷりあゝ至福 今関満喜子
 青田波器用に泳ぐ対の軽鴨 魚地 照子
 夏料理酢の一滴にきまりけり 川島 通則
 椎青葉黒く揺らして極相林 向後 寛
 茅の輪くぐる妹が「いのち」を祈りつつ 越川せつ子
 悠然と墓石を守る蜥蜴かな 小松 藤男
 梅雨寒し引越し猫は戻りけり 佐瀬 輝夫
 草深く滴りやまぬ防空壕 椎名万里子
 枕元空振りなるも蚊一匹 市東富美江
 水増して流れ行くもの梅雨の川 鈴木とし子
 岩滴り元氣貰いて栗駒山登る 鈴木 利子

砂山を風吹き抜けて月見草 玉虫 栗扇
 紫陽花を写す川面の雫かな 土屋美枝子
 卯の花や人家の先の船溜まり 土屋 義昭
 夕立や火の見の下に身をひそめ 戸村 静華
 水色をバツクに額の花咲けり 早川 勇
 偉丈夫ら三社祭に上京す 藤田 雅夫

短歌

完全のトマト啄む鳥の来て 吾より先に味見をすまず 高梨 キヨ
 我が体賞味期限も切れそうに 足腰いたみ労る日々を 内藤 くに
 梅雨晴れ間夫婦となりて五十年 我慢くらべや引き分けなりし 越川 義則
 ……………
 初挽ぎのしし唐辛子ポケットに 陽の温もりと共にしのばす 青木 秀子
 杉森の中より聞こゆる大瑠璃の 声を美しきと湖畔を歩く 浅野 榮子

笑みながら寄り来る孫は背伸びして 実はねあのねと声をひそめり 押尾 輝子
 麦の穂を黄金の波とゆるがせて 六月の風の吹き通りゆく 椎名美枝子
 演奏後のピオラ奏者の若き女 一瞬目が合ひ心惹かれり 田崎 尚美
 みどり濃き山脈見つ久びさに うから等とゆく奥州の旅 芹川 初子
 一人暮らし二年目となる男の孫の マンション見たしとついて来りけり 鈴木まさ子
 父の日に「感謝をこめて」と娘より 歯を気づかうや蒲鉾届く 加瀬 弘子

初夏の風に風鈴鳴りくるを ひとり留守居の窓辺に聞きぬ 西山満里子
 薄桃の睡蓮水面に写りゐる 実物よりもはつか濃ゆしも 八角 三枝
 道の駅に浜茄子の苗木元氣なく 売られてゐるを知床思う 水須 俊
 いつよりか糠雨降れど釣人ら 川面見詰めて帰るともせず 斎藤つね子

作品展

◎町民会館ミニギャラリー

8月 華舟会
 9月 水墨画クラブ

◎文化会館ロビー展

8月 水墨画クラブ
 9月 横芝写真クラブ

◎サビア展

8月 横芝写真クラブ
 9月 短歌会

◎銚子商工信用組合展

8月 俳句会
 9月 絵手紙ひかりの詩



伊藤順一の大作

この絵は、町出身の画家伊藤順一が残した絵画の中で二番目に大きい縦180cm、横225cmのF1500号の大作である。

作品名は「里の風土記 No.1」とされ、この里シリーズを何点も制作した。写真はその代表作で、一九九六年にアクリル画で制作され、同年に第四八回中美展(中央美術協会主催)で優秀賞を受賞している。

伊藤順一の人物画作品の特徴は、繊細な少女を描いた作品と、この「里の風土記 No.1」のように、里の風景を背に、無骨な少年と老夫婦などを描いた作品とに大きく分けられる。里シリーズで描かれる人物は、少年を中心に、その後ろには共通して老夫婦が描かれており、作品によっては少女や牛などが加わっている。また、里シリーズ

ズには、決して少年の両親はいないのも特徴である。今となっては何を思っているのか知るよしもないが、この里シリーズは、彼が少年のころに育ったふるさとと祖父母を思っただけのように思える。

町民ギャラリーでは、九月二十一日まで「伊藤一路・順一親子展」を開催しています。ぜひ、この機会に実際の絵をご覧ください。(社会文化課 道澤 明)



▲里の風土記No.1